

Contemporary India Forum

Quarterly Review

現代インド・フォーラム

No. 62

2024年 夏季号

<https://www.japan-india.com/>

特集：インド総選挙の結果

第18次インド連邦下院選挙——世界を驚かせた有権者の選択

The 18th Lok Sabha Elections in India: Voters' Choice Surprised the World

三輪博樹(帝京大学法学部政治学科 教授)

Hiroki MIWA (Professor, Department of Political Science,
Faculty of Law, Teikyo University)

北インドにおけるインド人民党の大敗とモディ人気の翳り

Modi Wave Faded and BJP Lost in North India

上田知亮(東洋大学法学部 准教授)

Tomoaki UEDA (Associate Professor, Faculty of Law, Toyo University)

インド人民党の南インド進出と存在感を強めた地域政党

BJP's expansion to South India and regional parties

that have strengthened their presence

弓賀政幸(岐阜女子大学 特別客員教授)

Masayuki TAGA (Visiting Professor, Gifu Women's University)



公益財団法人 日印協会
The Japan-India Association



※本誌掲載の論文・記事の著作権は、公益財団法人日印協会が所有します。

※ 無断転載は禁止します。(引用の際は、必ず出所を明記してください)

※人名・地名等の固有名詞は、原則として執筆者の意向を尊重しています。

※政党名等の日本語訳は、筆者が使用しているものをそのまま掲載しています。

※各論文は、執筆者個人の見解であり、文責は執筆者にあります。

※ご意見・ご感想は、公益財団法人 日印協会宛にメールでお送り下さい。

E-mail : partner@japan-india.com

件名「現代インド・フォーラムについて」と、明記願います。

現代インド・フォーラム 第62号 2024年夏季号 2024年7月5日発行

発行人 齋木 昭隆

編集 現代インド研究センター (堀本 武功 小島 眞)

発行所 公益財団法人 日印協会

〒102-0083 東京都千代田区麴町 1-6 麴町保坂ビル 6F

TEL: 03(6272)4408 E-mail: partner@japan-india.com

ホームページ: <https://www.japan-india.com/>

第 18 次インド連邦下院選挙 —— 世界を驚かせた有権者の選択

The 18th Lok Sabha Elections in India:

Voters' Choice Surprised the World

帝京大学法学部政治学科 教授

三輪博樹

Hiroki MIWA

Professor, Department of Political Science, Faculty of Law,
Teikyo University

***Abstract :** The 18th Lok Sabha Elections held in India from April to June 2024 ended with the unexpected result of the ruling Bharatiya Janata Party (BJP) losing its majority. Although the BJP managed to stay in power and the Narendra Modi government has entered its third term, some difficulties are expected in his future political management. In this paper, I first provide an overview of the trends and results of this general election. I then examine the results from three perspectives: people's dissatisfaction with the government's economic policies, the opposition coalition's good performance, and the issues surrounding the opinion polls and exit polls. Lastly, I examine the future prospects for the ruling BJP and the Modi government in light of political developments over the decade since 2014.*

はじめに

2024 年 4 月から 6 月にかけてインドで行われた第 18 次連邦下院選挙は、与党インド人民党 (BJP) の過半数割れという予想外の結果に終わった。BJP は政権の維持には成功し、ナレンドラ・モディ政権は 3 期目に入ったが、今後の政治運営には困難も予想される。本稿では、今回の総選挙の動向と結果について概観した後、選挙結果について、「経済政策に対する人々の不満」「野党連合の健闘」「世論調査をめぐる問題」という 3 つの観点から検討する。最後に、2014 年以降の 10 年間の政治動向をふまえて、与党 BJP とモディ政権の今後の見通しについて検討する¹。

I. 予想外の結果に終わった第 18 次連邦下院選挙

1. 選挙戦の動向

今回の第 18 次連邦下院選挙は、BJP を中心とする与党連合・国民民主連合 (NDA) と、インド国民会議派などを中心とする新たな野党連合・インド国民開発包摂連合

(INDIA) (2023年7月結成)の対決という構図となった。野党連合 INDIA が与党連合 NDA にどこまで迫れるかが注目されたが、事前の世論調査などから、BJP と NDA が勝利を収め、現職のモディ首相が 3 期目の政権を発足させることはほぼ確実と見られていた。

与党 BJP は 4 月 14 日、総選挙に向けて、「モディの約束 2024 (Modi ki Guarantee 2024)」と題する選挙綱領を発表した。綱領の表紙では、「2047 年までにインドを先進国 (Viksit Bharat) にする」と宣言され、本文では、国内の社会的・経済的な問題に対処するための 24 項目から成る「約束」が掲げられた。一方、野党の会議派は、4 月 5 日に「正義の文書 (Nyay Patra)」と題する選挙綱領を発表した。会議派は、「若者」「女性」「農民」「労働者」および「社会的に取り残された人々」を、正義を実現するための「5 つの柱」と位置付け、これらの人々が直面する問題に取り組むと主張した。

投票は 4 月 19 日から 6 月 1 日まで 7 回 (4 月 19 日・26 日、5 月 7 日・13 日・20 日・25 日、6 月 1 日) に分けて行われ、開票は 6 月 4 日に行われた。中央選挙管理委員会の発表によれば、今回の総選挙での有権者総数は約 9 億 6,880 万人、前回 (2019 年) から約 7,200 万人の増加となった。全体の投票率は 65.79% となり、過去最高の投票率を記録した前回 (2019 年、67.40%) を 1.61 ポイント下回った。投票率が前回は下回ったのは、2004 年以来約 20 年ぶりのことである。投票率が低下した理由について、インド国内のメディアでは、投票期間中に記録的な熱波に襲われたことや、与党連合の勝利が確実視されていたため、有権者の間で選挙に対する関心が高まらなかった可能性などが指摘されている。

2. 選挙結果と第 3 次モディ政権の成立

開票結果は表 1 に示すとおりである²。出口調査では与党連合の圧勝が予想されていたが、実際には、BJP は前回 (303 議席) から大きく議席を減らし、過半数割れとなる 240 議席の獲得にとどまった。与党連合全体では過半数を確保したが、こちらも議席数は大幅な減少 (352 議席→293 議席) となった。一方、野党の会議派は前回からほぼ倍増となる 99 議席を獲得し、野党連合 INDIA 全体でも、NDA の議席数に迫る 234 議席の獲得となった。

表1 第18次インド連邦下院選挙結果

	議席数	増減	得票率
国民民主連合 (NDA)	293		
インド人民党 (BJP)	240	-63	36.56
テルグ・デーサム党 (TDP)	16	+13	1.98
ジャナタ・ダル統一派 (JD(U))	12	-4	1.25
シヴ・セーナー (SHS)	7	-11	1.15
公民の力党 (ラーム派) (LJP (RV))	5	-1	0.44
ジャナ・セナ党 (JNP)	2	+2	0.23
ジャナタ・ダル世俗主義派 (JD(S))	2	+1	0.34
民族ローク・ダル (RLD)	2	+2	0.14
その他 (7政党)	7	--	--
インド国民開発包摂連合 (INDIA)	234		
インド国民会議派 (INC)	99	+47	21.19
社会主義党 (SP)	37	+32	4.58
全印草の根会議派 (AITC)	29	+7	4.37
ドラヴィダ進歩連盟 (DMK)	22	-2	1.82
シヴ・セーナー (ウダヴ派) (SHS (UBT))	9	+9	1.48
民族主義会議派 (シャラドチャンドラ派) (NCP (SP))	8	+8	0.92
民族ジャナタ・ダル (RJD)	4	+4	1.57
インド共産党マルクス主義 (CPI (M))	4	+1	1.76
ムスリム連盟 (IUML)	3	0	0.27
庶民党 (AAP)	3	+2	1.11
ジャールカンド解放戦線 (JMM)	3	+2	0.41
インド共産党マルクス・レーニン主義 (解放派) (CPI (ML) (L))	2	+2	0.27
解放パンサー党 (VCK)	2	+1	0.15
インド共産党 (CPI)	2	0	0.49
ジャンムー・カシミール民族協議会 (JKNC)	2	-1	0.18
その他 (5政党)	5	--	--
第三グループ	16		
YSR会議派 (YSRCP)	4	-18	2.06
その他 (5政党)	5	--	--
無所属	7	--	--
合計	543		

(出所) 以下の各 WEB サイトによる (2024 年 6 月 9 日閲覧)

インド中央選挙管理委員会 (<https://results.eci.gov.in/PcResultGenJune2024/index.htm>)

India Today (<https://www.indiatoday.in/elections>)

Times of India (<https://timesofindia.indiatimes.com/elections/lok-sabha-election>)

(注1) 「増減」欄の数値は、2019年の第17次連邦下院選挙での獲得議席数からの増減を示す。

(注 2) 「得票率」欄の単位は%である。

(注 3) この表は、『インド経済フォーラム』(株式会社インド経済フォーラム) 2024 年第 6 号に掲載の分析記事のために、上述の出所にもとづいて筆者が作成したものである。

結果が判明した直後、モディ首相は、「NDA は 3 回続けて人々からの信任を得られることとなった。これは歴史的な偉業である」という文章を X(旧ツイッター)に投稿し、与党連合の勝利を強調した。しかし、テレビなどで報じられた BJP 党本部の様子や、インド国内外の報道ぶりなどは、今回の総選挙における BJP の実質的な「敗北」を示すものであった。会議派のマリカルジュン・カルゲ総裁は、この結果はモディ首相にとっての「政治的・精神的な敗北」であると語っている。

今回の結果が BJP にとって不本意なものであったことは間違いないだろうが、ひとまず政権の維持には成功した。新政権の就任宣誓式は 6 月 9 日に行われ、第 3 次モディ政権が発足した。インドにおいて 1 人の人物が 3 期続けて首相を務めるのは、初代首相ジャワハルラル・ネルー(在任:1947-64 年)以来のことである。新政権の閣僚はモディ首相を含めて 72 人(閣内大臣 31 人、閣外大臣 41 人)で、第 1 次モディ政権発足時(2014 年)の 45 人、第 2 次政権発足時(2019 年)の 58 人から大幅な増加となった。72 人の新閣僚のうち、BJP 所属の議員が 61 人、NDA 所属の友党に所属する議員が 11 人となっている。

新閣僚の所掌は、就任宣誓式の翌 10 日に発表された。第 3 次モディ政権では前政権からの政策の継続性が重視されていると見られており、ラージナート・シン国防相、アミット・シャー内相、スブラマニヤム・ジャイシャンカール外相、ニルマラ・シタラマン財務相の主要 4 閣僚は全員再任された。また、ニティン・ガドカリ道路交通・高速道路相など、インフラ整備に関わる閣僚の多くも再任された。

II. 選挙結果の分析——予想はなぜ外れたか

1. 経済政策に対する人々の不満

今回の総選挙で与党 BJP の勢力が低下した原因として、インド国内外のメディアなどで広く指摘されているのは、物価・雇用・貧困などの経済問題に関する有権者の不満が大きく、このことが、モディ政権に対する批判につながった可能性である。デリーの研究機関である発展途上社会研究センター(CSDS)が 4 月中旬に発表した投票前調査の結果と、開票直後の 6 月上旬に発表した投票後調査の結果でも、前述の経済問題に対する人々の不満が非常に大きかったことが示されている。CSDS は、経済問題に対する人々の不満が、今回の選挙で BJP が議席を減らした最大の要因であったとの見

方を示している³。

ただし、物価・雇用・貧困などの経済問題に対してインドの人々が不満を抱いているという状況は、最近始まったことではない。インドのニュース誌 *India Today* が半年ごとに発表してきた世論調査「Mood of the Nation」の結果によれば、「雇用の不足」と「物価の上昇」という 2 つの問題に対する人々の不満が大きいという状況は、第 1 次モディ政権下の 2017 年頃から現在に至るまで続いている。それにもかかわらず、今回の総選挙で BJP が勝利を収めるとの予想が示されていたのは、モディ首相個人が有権者の間で高い人気を維持していることや、経済分野以外の政策に対する評価が高いことなどによって、経済政策に対する人々の不満がある程度相殺されるだろうと見られていたからであった。

前述の *India Today* 誌の分析では、モディ首相が有権者の間で継続して高い人気を維持していることが示され、このことが、経済政策に対する人々の不満が大きいにもかかわらず、BJP の支持率が高い理由であるとされていた。また、今回の CSDS の投票前調査では、モディ政権のおかげで世界におけるインドの地位が高まったと認識されていること、ラーマ寺院の再建などの政策によってヒンドゥーのアイデンティティの強化が見られること、モディ首相個人が現在も高い人気を得ていることなどが指摘され、このことが、BJP と与党連合にとって有利に働いているとの見方が示されていた⁴。

しかし実際の選挙結果は、与党 BJP の過半数割れという予想外のものであった。喧伝されてきた「モディ首相の人気」や「経済分野以外の政策に対する評価」などの要因が、経済政策に対する人々の不満を相殺できるほど大きくはなかった、ということになるのだろう。しかし問題は、それをなぜ事前に予想できなかったのかということである。今回の総選挙では、インド国内外のジャーナリストや研究者の多くが、有権者の投票行動を正しく予想することができなかった。この原因については今後さらなる検証と分析が必要となるが、以下では、現時点で考えられる 2 つの点について検討してみたい。

2. 野党連合の健闘

第 1 に、野党連合 INDIA が予想外の健闘を見せたことが挙げられる。この連合は、2023 年 7 月、ジャナタ・ダル統一派 (JD(U)) のニティシュ・クマール党首 (ビハール州首相) や、全印草の根会議派 (AITC) のママタ・バナジー党首 (西ベンガル州首相) などが主導し、これに会議派が加わる形で結成された。連合の略称が「INDIA」となるようにしたのは会議派のラフル・ガンディー元総裁のアイディア、正式名称を「インド国民開発包摂連合 (Indian National Developmental Inclusive Alliance)」とした

のは、AITC のバナジー党首のアイデアだったとされる。

野党連合 INDIA は、結成直後はインド国内でかなりのインパクトをもって受け止められた。しかしその後、総選挙直前の 2024 年 1 月に JD(U) が離脱して与党連合 NDA への鞍替えを決定し、さらに、会議派と AITC の候補者調整が失敗するなど、各党間の選挙協力の難航が伝えられるようになると、INDIA に対する注目度も下がり、インド国内ではネガティブな報道も見られるようになった。しかし実際には、前節で述べたように、会議派も野党連合 INDIA も、大幅に議席を増加させることに成功した。

今回の総選挙における BJP の得票率 (36.56%) は、前回 (2019 年、37.36%) から 0.8 ポイントしか減少していない。また、会議派の得票率 (21.19%) は、前回 (19.49%) から 1.7 ポイントの増加にとどまっている。得票率に大きな変化がなかったにもかかわらず、両党の議席数が大きく増減したことは、各州での野党各党の選挙協力がある程度機能した可能性を示唆している。今後、州ごとの詳細な分析が必要である。

3. 世論調査をめぐる問題

第 2 に、世論調査が有権者の考えを正しく把握できていたのかという問題がある。モディ首相は 2014 年の就任以来、ラジオ放送や SNS などを通じて積極的な広報戦略を展開してきたが、その一方で、同首相や NDA 政権の政策に対する批判的な声が抑圧されるなど、言論や報道の自由が脅かされているという批判が見られるようにもなった。国際 NGO 「フリーダム・ハウス」が毎年発表している「世界の自由度」では、2021 年以降、インドに対する評価は「部分的に自由 (Partly Free)」となっている⁵。また、国際 NGO 「国境なき記者団」が 2024 年に発表した最新の「世界報道自由度指数」では、インドは 180 カ国中 159 位と、非常に低い順位に位置している⁶。

こうした中で、新聞やテレビなどの報道機関に対する人々の信頼度も低下している。インドで 2012 年と 2023 年に行われた「世界価値観調査」の結果のうち、報道機関 (the press) に対する信頼度 (confidence) を比べてみると、報道機関を「非常に信頼している」という回答の割合は 2012 年から 2023 年にかけて減少 (34.6%→25.7%) し、その一方で、「まったく信頼していない」という回答の割合は増加 (5.1%→12.4%) している⁷。インドでは現在、新聞社やテレビ局などが調査会社と提携して頻繁に世論調査を行っているが、言論や報道の自由が抑圧され、報道機関に対する信頼度が低下している中で、人々が調査に対してどれほど本当のことを答えてくれているのかは疑わしい。

以下はまったくの推測でしかないが、今回の総選挙では、世論調査や出口調査に対

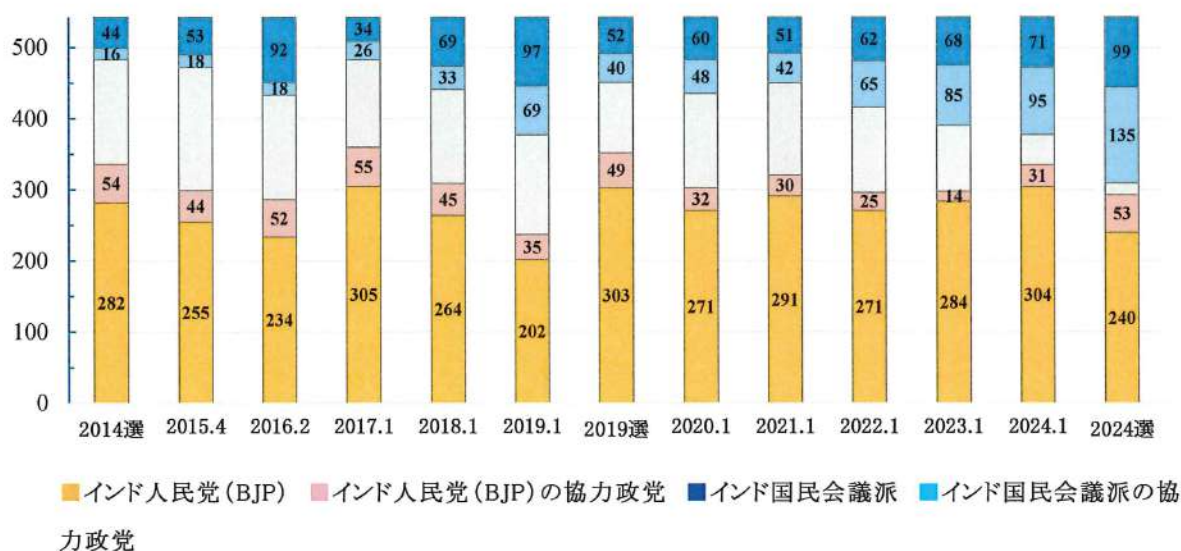
して本当のことを答えてくれなかった有権者がこれまで以上に多く、そのため、選挙結果を正しく予想することができなかったのではないか。実際、6月6日付ロイターニュース（日本版）では、インドの調査会社代表の言葉として、社会的な階層の低い有権者の中に、政治的見解の異なる関係者からの攻撃を恐れて、調査に対して投票先を明らかにしない者が多かったことや、女性有権者の多くが調査に対して代理での回答を頼んだため、投票行動が誤って推定された可能性などが指摘されている⁸。

III. 今後の見通し——変わるものと変わらないもの

1. インド人民党の今後

今回の選挙結果は予想外のものではあったが、それは、事前の世論調査や出口調査などの結果から、BJPの勝利に対する「期待値」が上がり過ぎていたからに他ならない。第1次モディ政権が発足した2014年から現在までの約10年間を通して見れば、今回の結果はそれほど大きな驚きではない。図1は、前節で紹介した世論調査「Mood of the Nation」の結果にもとづいて、それぞれの調査時期ごとに算出された各政党陣営の予想議席数と、2014年・2019年・2024年の3回の総選挙における、各陣営の実際の獲得議席数をまとめたものである。この図からも分かるように、今回の総選挙におけるBJPの議席数の減少は、これまでの世論調査から予想されてきた変化の範囲内に収まっている。

図1 世論調査にもとづく各政党陣営の予想議席数と実際の獲得議席数



(出所) 世論調査にもとづく予想議席数は、*India Today* 各号による。総選挙における実際の獲得議席数は、インド中央選挙管理委員会のWEBサイトによる（2024年6月9日閲覧）。

(注) 図の縦軸は議席数を、横軸は調査時期（年・月）をそれぞれ示す。「2014選」「2019選」「2024選」は、それぞれの総選挙における実際の獲得議席数を示す。

2014年以降のBJPの予想議席数の変化が一定の範囲内に収まっているのは、同党が「固い」支持基盤を有しているからであると考えられる。この支持基盤は、ヒンドゥー多数派主義のイデオロギーやモディ首相個人に対する人々の信頼などにもとづいて、有権者の間に形成されてきたものである⁹。そして、この固い支持基盤に上乘せするような形で、NDA政権の政策に対する評価などにもとづいて、BJPに対する人々の支持は上下を繰り返しており、これが、図1に示される予想議席数の変化となって表われている。

現状では、この固い支持基盤だけでBJPが下院の過半数を確保することは不可能である。したがって、今後、経済政策に対する有権者の不満がさらに大きくなったり、野党連合の選挙協力がより効果的に機能したりすれば、BJPが今回以上に議席数を減らして政権を失うことはあり得る。しかし、少なくともモディ首相が現役でいる間は、BJPが大きく議席を減らす可能性は低く、同党は今後も政党政治における中心であり続けるだろう。

他方で、第2次モディ政権では、ウツタル・プラデーシュ（UP）州アヨーディアにおけるラーマ寺院の再建や、イスラム教徒に不利とされる改正国籍法の実施など、ヒンドゥー多数派主義的な政策が推し進められてきた。これらの政策が、前述したBJPの固い支持基盤の強化・拡大につながるのか、逆に有権者の反発を招いて支持基盤の弱体化につながるのか、現時点ではまだ分からない。今回、UP州でBJPが議席数を減らした要因のひとつに、ヒンドゥー多数派主義的な政策に対する人々の反発があった可能性もある。さらに、1950年生まれで今年74歳になるモディ首相は、近い将来に政治の表舞台から去ることになる。今後のモディ首相の去就が、BJPの支持基盤に大きな影響を及ぼす可能性もまた否定できない。

2. 第3次モディ政権の今後

前項で述べたように、少なくともモディ首相が現役でいる間は、BJPの勢力が大幅に低下する可能性は低い。しかし、今回の総選挙によって成立した第3次モディ政権は、同首相にとって初めての連立政権であるため、今後の政治運営には困難も予想される。NDAを構成する第2党のテルグ・デーサム党（TDP）と第3党のJD(U)は、BJPと会議派との間でこれまでに何度も協力相手を変えてきた「実績」がある。前節で述べたように、JD(U)は今年1月にNDAに鞍替えするまでは、野党連合INDIAの中心的な存在だったのである。そしてこれら2党は合わせて28議席を保持しているため、両党がNDAから離脱すれば、モディ政権はただちに危機に瀕することになる。逆に野党連合にとっ

ては、これら 2 党を鞍替えさせることに成功すれば、モディ政権を倒すことも不可能ではない状況である。

今後、BJP が野党側のいくつかの政党を鞍替えさせ、NDA 側に引き入れることに成功しない限り、モディ首相は、TDP や JD (U) をはじめとする協力政党の顔色をうかがいながら政治を運営していかざるを得ない。外交や国防など、国全体に関わる政策が大きな影響を受ける可能性は低いが、第 2 次モディ政権のときに見られたような強引な政治運営や、農民・労働者・低カーストなどの社会的弱者層に不利になる政策を打ち出すことは難しくなるだろう。一方、野党側にとっては、今がモディ政権を倒せる千載一遇のチャンスである。NDA 側への鞍替えを防ぎ、野党連合の結束をどれだけ維持していけるかが重要となる。現在の状況は、与野党どちらにとっても正念場と言えるかもしれない。

おわりに

今回、磐石と思われた BJP が大きく議席を減らしたことは国内外の注目を集めたが、前節でも述べたように、そのこと自体はさほど驚きではない。今後注意すべきであるのは、BJP が過半数割れに追い込まれ、連立政権の形成を余儀なくされたことで、モディ政権の政治運営や政策決定がどれほどの影響を受けるかである。そしてさらに重要であるのは、今回の結果をもたらしたインドの有権者の投票行動を、筆者も含めて、ジャーナリストや研究者の多くが正しく予測できなかったことである。専門家はなぜ間違えたのか、世論調査や出口調査の結果は本当に正しかったのか、第 18 次連邦下院選挙の分析は、こうした反省とともに進めていかなければならない。

¹ 本稿の内容のうち、事実関係に関する部分は、特記ない限り、*The Hindu* の記事にもとづく。また、内容の一部は、『インド経済フォーラム』（株式会社インド経済フォーラム）各号に筆者が執筆した分析記事にもとづく。中央選挙管理委員会による公式発表の内容は、インド政府の報道情報局 (PIB) の WEB サイト (<https://pib.gov.in/indexd.aspx>) から入手した (2024 年 6 月 23 日閲覧)。

² 政党間の協力関係が曖昧であったため、NDA と INDIA をそれぞれ構成しているのが具体的にどの政党なのか、報道機関によって見解が異なっている。表 1 は *India Today* の WEB サイトにもとづくもので、NDA と INDIA 両陣営の構成政党をもっとも多く見積もったものとなっている。また、今回の総選挙の直前にいくつかの政党が分裂しているが、分裂後のどの政党をもとの政党の後継と見なすかによって、表の「増減」欄の数値が異なってくる。表 1 の「増減」欄は、*Times of India* の WEB サイトにもとづいてまとめた。

³ Suhas Palshikar, Sanjay Kumar and Sandeep Shastri, "Economy Takes Front Seat in 2024 Campaign," *The*

Hindu, Apr. 11, 2024, p.5; Sandeep Shastri, Suhas Palshikar and Sanjay Kumar, "A Return to an Era of Genuine Coalitions," *The Hindu*, Jun. 6, 2024, p.5. ePaper/International (<https://epaper.thehindu.com/reader>) (2024年6月23日閲覧)。

⁴ Suhas Palshikar, Sanjay Kumar and Sandeep Shastri, "Despite the Economy, How is the BJP Sitting Pretty?" *The Hindu*, Apr. 12, 2024, p.5. ePaper/International (2024年6月23日閲覧)。世論調査「Mood of the Nation」については、*India Today* 各号を参照。

⁵ フリーダム・ハウスのWEBサイト (<https://freedomhouse.org/>) を参照 (2024年6月23日閲覧)。

⁶ 国境なき記者団のWEBサイト (<https://rsf.org/en>) を参照 (2024年6月23日閲覧)。

⁷ 世界価値観調査のWEBサイト (<https://www.worldvaluessurvey.org/wvs.jsp>) 上でのオンライン分析による (2024年6月23日閲覧)。

⁸ 「インド総選挙の出口調査、低所得者らの意向捉えられず＝調査機関」ロイター、2024年6月6日、
【<https://jp.reuters.com/markets/japan/funds/RS5QM2GFVBP6BJGJLWHAWUGZMM-2024-06-05/>】
(2024年6月23日閲覧)。

⁹ 三輪博樹「インドにおける第17次連邦下院選挙の結果と今後の見通し」『現代インド・フォーラム』No. 42、2019年、6-7頁；三輪博樹「第2次モディ政権のもとでのインド国内政治」『世界経済評論』Vol. 66 No. 3、2022年、20-21頁。

執筆者紹介 三輪博樹 (みわ・ひろき)

筑波大学大学院国際政治経済学研究科単位取得退学。修士(学術)。在インド日本国大使館専門調査員、筑波大学大学院人文社会科学研究所助教、拓殖大学国際学部非常勤講師、放送大学客員准教授などを経て、2018年4月より帝京大学法学部准教授。2023年12月より現職。専門は比較政治学、インド政治。



北インドにおけるインド人民党の大敗とモディ人気の翳り
Modi Wave Faded and BJP Lost in North India

東洋大学法学部 准教授

上田知亮

Tomoaki UEDA

Associate Professor, Faculty of Law, Toyo University

Abstract: *Here is considered the results of the 2024 Indian general election in the North, West, East, and Northeast states, particularly 13 states and Delhi, which have over 10 seats respectively.*

The ruling Bharatiya Janata Party (BJP)-led National Democratic Alliance (NDA) and the Indian National Congress (INC)-led Indian National Developmental Inclusive Alliance (INDIA) in opposition competed in this general election. The nation-wide outcome was that the INDIA made an unexpected leap forward while the NDA lost many seats though keeping the majority. It is more importance that the BJP, which won 63 less seats than the previous 2019 general election, lost the single-party majority.

Special attentions should be paid to 4 states for the purpose of understanding the BJP's poor performance in the general election. In Odisha, the BJP gained nearly all seats, defeating the Biju Janata Dal (BJD) who had ruled the state since 2000. The BJP also won the simultaneous Odisha Assembly election. In West Bengal, the BJP took a few steps backward though the INDIA did not reach an agreement on seat-sharing arrangement. In Maharashtra, the BJP and the NDA went down hard because of failing in penetrating the poor and the socially lower communities in the rural areas. In Uttar Pradesh, the BJP suffered massive defeat mainly due to waning popularity of Narendra Modi.

The unanticipated huge defeats in Uttar Pradesh and Maharashtra are thought to make the BJP revise its strategies on state assembly elections, coalition politics, and policy making.

はじめに

本稿が検討するのは、北部ならびに西部、東部、北東部の諸州のうち定数が10以上の13州とデリー首都圏の2024年連邦下院議員総選挙の結果である。

インド人民党 (BJP) 率いる国政与党連合の「国民民主連合」(NDA) に、インド国民会議派 (INC) を中心とする野党連合の「インド国民発展包摂連合」(INDIA) が挑んだ

というのが、今回の総選挙の基本的構図である。全国レベルの選挙結果としては、INDIA 陣営が予想外の躍進を果たした一方で、NDA 陣営は過半数を確保したものの、議席を大幅に減らした。とりわけ BJP は前回の 2019 年総選挙から実に 63 もの議席を減らし、単独過半数を失った。

こうした選挙結果を踏まえて、本稿では BJP の獲得議席の増減に着目する。表 1 は、本稿が考察する州について、2019 年総選挙と比較して BJP の議席減少数が小さい（増加数が大きい）順に並べたものである。これら選挙結果のなかで特筆すべきことは、以下の 4 点である。

表 1. 主要州における BJP の獲得議席数（括弧内は定数）

	議席数	前回比
オディシャ州 (21)	20	+12
マディヤ・プラデーシュ州 (29)	29	+1
チャットーイスガル州 (11)	10	+1
アッサム州 (14)	9	±0
デリー首都圏 (7)	7	±0
グジャラート州 (26)	25	-1
パンジャブ州 (13)	0	-2
ジャールカンド州 (14)	8	-3
ビハール州 (40)	12	-5
ハリヤナ州 (10)	5	-5
西ベンガル州 (42)	12	-6
ラージャスターン州 (25)	14	-10
マハーラーシュトラ州 (48)	9	-14
ウッタル・プラデーシュ州 (80)	33	-29

第 1 に、オディシャ州において 2000 年から州政権を握り続けてきたビジュ・ジャンタ・ダル (BJD) を破り、BJP が議席をほぼ独占する圧勝を取めた。同時に実施された州議会議員選挙でも BJP は勝利し州政権を奪取した。第 2 に、西ベンガル州では INDIA 陣営内での候補者調整が失敗に終わったにもかかわらず、BJP は漁夫の利を得られず敗北を喫した。第 3 に、マハーラーシュトラ州では BJP および NDA は農村部の貧困層および社会的下位層に支持を広げられず大敗した。第 4 に、そして最も重要なことに、ウッタル・プラデーシュ州ではモディ人気の低下を主因として BJP は惨敗した。

マハーラーシュトラ州とウッタル・プラデーシュ州における想定外の大敗は、BJP の今後の選挙戦略や政権運営、政策決定に少なからぬ影響を及ぼすことになると考えら

れる。

I. BJP はいかに勝利したか

本章では、BJP が勝利した 5 州（オディシャー州、マディヤ・プラデーシュ州、チャッティースガル州、アッサム州、グジャラート州）とデリー首都圏の選挙結果を、前回総選挙からの議席増加数が多い順に概観する。

1. オディシャー州

北部、西部、東部、北東部の諸州のなかで BJP が議席を 2 桁伸ばした州は東部のオディシャー州だけである。オディシャー州（定数 21）では、BJP が 20 議席（得票率 45.3%）の圧倒的勝利を記録し、残る 1 議席は会議派がかろうじて確保した（得票率 12.5%）。

2000 年から州政権を握り続けてきた BJD は全敗を喫し（得票率 37.5%）、同時に実施された州議会選挙（定数 147）でも BJP に敗北して政権を失った（BJP 78 議席、BJD 51 議席）。オディシャー州政治史において今回の選挙は画期的な意義をもつことになるだろう。

前回の 2019 年選挙では BJP は都市部でこそ優位に立ったものの、農村部では BJD に遅れを取るようになった。だが今回 BJP は、米作補助金を公約に盛り込んだことも奏功して、農村部で BJD を凌駕することに成功した¹。

2. マディヤ・プラデーシュ州

マディヤ・プラデーシュ州（定数 29）では BJP が全議席を独占する地滑りの大勝を収めた（得票率 59.3%）。全敗を喫した INC は得票率も 32.4%と BJP の足元にも及ばなかった。BJP は都市部と農村部のいずれにおいても INC を圧倒した。上位カーストから OBC、ダリト、先住民にいたるまでヒन्दゥー教徒の間の INC 支持は著しく低調に終わり、BJP へのヒन्दゥー教徒の支持は盤石なまま一切揺らがなかった。INC はムスリムの 86%から票を集めたが、議席にはつながらなかった²。

3. チャッティースガル州

2000 年にマディヤ・プラデーシュ州から分離して生まれたチャッティースガル州（定数 11）でも、BJP が議席をほぼ独占する 10 議席（得票率 52.7%）を獲得して圧勝を収めた。上位カーストの 74%、OBC の 56%、ダリトの 59%の支持を確保したことがこの大勝につながっている。他方、残る 1 議席をかろうじて確保した INC（得票率 41.1%）は

先住民の 59%から支持を集めた³。

4. アッサム州

北東部のアッサム州（定数 14）では、NDA 陣営が 11 議席を獲得して大勝した。その内訳は、BJP が 9 議席（得票率 37.4%）、アソム人民会議（AGP）が 1 議席（得票率 6.5%）、統一人民党リベラル派（UPPL）も 1 議席（得票率 2.4%）である。INC は 3 議席にとどまった（得票率 37.5%）。

だが INC に勢力拡大の余地がなかったわけではない。ムスリムを支持基盤とする全インド統一民主戦線（AIUDF）（得票率 3.1%）と選挙協力ができていれば、NDA と伯仲する可能性はあっただろう。

5. デリー首都圏州

デリー首都圏（定数 7）では、得票率 54.4%と圧倒的な強さを見せつけた BJP が 7 議席を独占した。INDIA 陣営は AAP と INC が選挙協力を行って BJP に対抗したが、BJP の牙城を崩すには全く至らなかった（得票率は順番に 24.2%、18.9%）。

モディ政権の直近 5 年間の業績に対する有権者の評価は高く、BJP にもう 1 期政権を委ねたいという回答は 63%にのぼった。さらには、モディが首相候補であるかどうかに関わりなく BJP に投票すると回答した者も 60%を占めた。デリーにおいて BJP は幅広い支持の獲得に成功しており、所得階層別で見ると、富裕層の 59%、中間層の 50%、貧困層ですら 52%が BJP に投票したとみられる⁴。

6. グジャラート州

ナレンドラ・モディ首相がかつて州首相を務めたグジャラート州（定数 26）では、BJP が限りなく独占に近い 25 議席（得票率 61.9%）を掻き集めて圧倒的な勝利を記録した。INC はかろうじて 1 議席（得票率 31.2%）を確保するにとどまった。INC との選挙協力のもと 2 議席を争った庶民党（AAP）は議席獲得に至らなかった（得票率 2.7%）。

前回から 1 議席減らしたとはいえ、驚異的な得票率の高さから判断すると、BJP への支持は極めて堅牢である。ムスリムの間での BJP の得票率は全国平均で約 8%であるのに対して、グジャラート州では実に 29%に達していることは、BJP 支持の頑健さを象徴している。ただし、モディが首相候補でなければ違う政党に投票すると回答した BJP 支持者が 27%もいることは、モディ人気の高さと同時に、個人に依存した政党支持の脆弱性を示してもいる⁵。

II. BJP はいかに敗北したか

本章では、BJP が敗北した 8 州（パンジャープ州、ジャールカンド州、ビハール州、ハリヤナ州、西ベンガル州、ラージャスターン州、マハーラーシュトラ州、ウッタル・プラデーシュ州）の選挙結果を、前回総選挙からの議席減少数が少ない順に概観する。

1. パンジャープ州

パンジャープ州（定数 13）では、10 議席を確保した INDIA が議席なしの BJP を圧倒した。INDIA 陣営の内訳は INC が 7 議席（得票率 26.3%）、AAP が 3 議席（得票率 26%）である。ただし、INC と AAP は選挙協力を一切行わず、すべての選挙区で競合した点には留意すべきである。こうした重大な隙があったにもかかわらず、BJP は 1 議席も獲得できず得票率も 18.6%と振るわなかった。残る 3 議席の行方は、アカーリー・ダル（SAD）が 1 議席（得票率 13.4%）、無所属候補が 2 名当選となっている。

BJP と SAD が選挙協力を通じてそれぞれ 2 議席を確保することに成功した前回の 2019 年総選挙と比較すると、今回は BJP が選挙戦略を誤ったと考えられる。それに加えて、中央の NDA 政権に不満を抱いていると回答した割合が 51%にのぼっており、その最大の要因は失業問題と物価上昇にあることが指摘されている⁶。

2. ジャールカンド州

ジャールカンド州（定数 14）では、NDA 陣営が 9 議席を獲得した。内訳は、BJP が 8 議席（得票率 44.6%）、全ジャールカンド学生連合党（AJSUP）が 1 議席（得票率 2.6%）である。INDIA 陣営は、ジャールカンド解放戦線（JMM）の 3 議席（得票率 14.6%）と会議派の 2 議席（得票率 19.2%）で合計 5 議席を確保した。

こうした選挙結果は一見すると BJP の勝利のように思われる。しかし、BJP は 2019 年総選挙では 11 議席、2014 年総選挙では 12 議席を獲得していたことを踏まえると、INDIA 陣営の予想外の勢いに押されて BJP は実質的には敗北したと解釈するのが妥当であろう。

3. ビハール州

ビハール州（定数 40）では、BJP とジャナタ・ダル（統一派）[JD(U)] を中心とする NDA 陣営が 30 議席を獲得した。その内訳は、JD(U) が 12 議席（得票率 18.5%）、BJP も同じく 12 議席（得票率 20.5%）、公民の力党（ラーム・ヴィラース派）[LJP(RV)] が 5 議席（得票率 6.5%）、ヒンドゥスターン人民戦線（世俗派）[HAM(S)] が 1 議席（得

票率 1.4%) である。

他方、民族ジャナタ・ダル (RJD) と INC を中心とする INDIA 陣営は 9 議席にとどまった。内訳は、RJD が 4 議席 (得票率 22.1%)、INC が 3 議席 (得票率 9.2%)、インド共産党 (マルクスレーニン主義) 解放派 [CPI (ML) (L)] が 2 議席 (得票率 3%) である。残る 1 議席は無所属候補が勝利している。

こうした選挙結果は、一見すると NDA の大勝のようである。だが、前回の 2019 年総選挙では BJP が 17 議席、JD(U) が 16 議席、分裂前の公民の力党 (LJP) が 6 議席を獲得し、NDA 全体で 39 議席と完封に近い圧勝を収めたことを踏まえると、勢力が大きく後退したことは否めない。

世論調査によると⁷、社会階層別の得票率を 2019 年総選挙のものと比較したとき、NDA は上位カーストやヤードヴ以外の OBC、SC において大幅に支持を減らしている一方で、INDIA 陣営は SC の支持を極めて顕著に伸ばしている。とりわけ伝統的支持基盤である上位カーストにおいて NDA の支持率が 15 ポイントも低下していることは BJP にとって深刻な意味をもっている。

4. ハリヤナ州

ハリヤナ州 (定数 10) では、前回の総選挙で議席を独占した BJP がその半数の 5 議席 (得票率 46.1%) にまで後退し、INC に同じ議席数に並ばれ事実上の敗北を喫した。INC は 9 選挙区で戦って 5 議席 (得票率 43.7%) を獲得した。INC と連合を組む AAP は 1 選挙区に出馬したが議席獲得には至らなかった (得票率 3.9%)。

前回の総選挙と比較すると、BJP は上位カーストのジャートで 23 ポイント減の 27%、OBC で 29 ポイント減の 44%、SC で 34 ポイント減の 24%しか集票できなかった。他方 INC は驚異的な支持拡大に成功し、ジャートで 31 ポイント増の 64%、OBC で 29 ポイント増の 51%、SC で 40 ポイント増の 68%の票を獲得し、これらの社会階層において BJP を凌駕した。BJP がかりうじて 5 議席確保で踏み止まれたのは、ジャート以外の上位カーストからの 66% (前回比 8 ポイント減) の支持のおかげである⁸。

5. 西ベンガル州

定数が 10 議席以上の東部・北東部の 6 州のなかで NDA が唯一敗北したのが西ベンガル州 (定数 42) である。ここでは州与党の全インド草の根会議派 (AITC) が 29 議席 (得票率 45.8%) を得て勝利した。他方、BJP は 12 議席 (得票率 38.7%) にとどまった。残る 1 議席は INC がかりうじて確保した (得票率 4.7%)。

ただし、AITC が国政レベルでは INDIA 陣営に参画する一方で、州レベルでは選挙協力を拒否して 42 選挙区すべてに候補者を擁立したことを考慮すると、こうした選挙結果を INDIA の勝利と即断できないことには注意を要する。こうした INDIA 陣営の内紛にもかかわらず BJP が漁夫の利を得られず議席を減らしたことは、西ベンガル州への同党の浸透が決して容易ではないことを示している。

AITC が BJP の挑戦を退けることができた要因としては、以下の 3 点が指摘されている⁹。第 1 に、州政府による女性向け現金支給策が奏功して女性票を前回比 10.6 ポイント増の 53%獲得した。第 2 が、汚職批判をかわすため地域アイデンティティを強調し、BJP を反ベンガルの政党と批判した選挙戦略である。第 3 に、2019 年（改正）市民権法の影響もあり前回比 13 ポイント増の 73%にまでムスリムの支持が拡大した。

6. ラージャスターン州

ラージャスターン州（定数 25）では、BJP が 14 議席（得票率 49.2%）を確保して INDIA 陣営をかろうじて上回った。とはいえ前回の 2019 年総選挙から 10 議席も減らしており、BJP は事実上の敗北を喫したといえる。他方、INDIA は連合全体で 11 議席を確保する健闘をみせた。その内訳は、INC が 8 議席（得票率 37.9%）、インド先住民党（BAP）とインド共産党（マルクス主義）[CPI(M)] と民族民主党（RLP）がそれぞれ 1 議席である。なお候補者調整に失敗して INC と BAP が競合した選挙区が複数あったことは BJP に有利に働いた。

選挙後の世論調査によると¹⁰、BJP 支持者が多かったのは都市部、高学歴層、富裕層、そして上位カーストである。他方 INC が集票に成功したのは、農村部、低学歴層、ダリトや先住民、ムスリムといった下位の社会階層である。INC が勢力を回復できた主因は、他党との選挙協力によって幅広い社会階層に浸透できたことにある。他方 BJP の敗因としては、わずか半年前に実施された州議会議員選挙（定数 200）で 115 議席（得票率 41.7%）を獲得して勝利していたため、自信過剰に陥って油断していたことが挙げられる。

7. マハーラーシュトラ州

マハーラーシュトラ州（定数 48）では、NDA 全体でもわずか 17 議席と振るわず、30 議席を獲得した INDIA に大きく水を明けられた。NDA の 17 議席の内訳は、BJP が 9 議席（得票率 26.2%）、シヴ・セナー（SHS）が 7 議席（得票率 13%）、民族主義会議派（NCP）が 1 議席（得票率 3.6%）となっている。BJP は前回よりも多くの選挙区で候補者を擁立したにもかかわらず、得票率を 2 ポイント近く減らし議席も 14 減と大幅に勢

力を後退させた。

他方 INDIA は、INC が 13 議席（得票率 16.9%）、シヴ・セナー（ウダヴ・タークレ一派）[SHS(UBT)] が 9 議席（得票率 16.7%）、民族主義会議派（シャラード・パーワル派）[NCP(SP)] が 8 議席（得票率 10.3%）を獲得する躍進をみせた。

NDA 陣営は都市部、富裕層、上位カーストで優位に立ち、INDIA 陣営は農村部、貧困層、ダリト、ムスリムにおいて支持を伸ばしたと指摘されている¹¹。そのうちダリトに関しては、46%が INDIA に投票したのに対して、NDA に投票したのは 35%にすぎない。こうした投票行動は、5つの SC 留保選挙区すべてで INDIA が勝利していることに表れている。それに加えて、先住民は 55%が INDIA に、35%が NDA に投票しており、4つの ST 留保選挙区では INDIA が 3 議席、NDA が 1 議席を獲得している。

これら留保選挙区における惨敗が象徴しているように、農村部の貧困層および社会的下位層に支持を広げられなかったことが、マハーラーシュトラ州における BJP および NDA の敗因であったと考えられる。

8. ウッタル・プラデーシュ州

ウッタル・プラデーシュ州（定数 80）では、NDA 陣営が過半数を割り込む 36 議席にとどまり、43 議席を獲得して予想外の躍進を遂げた INDIA 陣営の後塵を拝することとなった。NDA 陣営の獲得議席の内訳は、BJP が 33 議席（得票率 41.4%）、民族ローク・ダル（RLD）が 2 議席（得票率 1.0%）、アプナー・ダル（ソネラル派）[AD(S)] が 1 議席（得票率 0.9%）である。前回の 2019 年に 62 議席（得票率 50%）、前々回の 2014 年には 71 議席（得票率 42.6%）と歴史的圧勝を記録していた BJP は、前回比で 29 議席、前々回比なら実に 38 議席も減らしたことになる。全国単位で減らした議席数 63 の半数近くを BJP はわずかこの 1 州で失ったのである。

他方 INDIA 陣営は、社会党（SP）が 37 議席（得票率 33.6%）、INC が 6 議席（得票率 9.5%）を得ることに成功した。残る 1 議席は、どちらの陣営にも属さない自由社会党（カンシー・ラーム派）[ASP(KR)] が確保している。同じく単独で選挙戦を戦った多数者社会党（BSP）は全 80 選挙区に候補者を立てたが議席獲得は叶わず、得票率も 9.4%にとどまった。

BJP 敗北と SP 躍進の要因としては以下の 5 点が指摘されている¹²。第 1 に、SP の「PDA 戦略」が奏功した。「PDA」とは、「その他の後進諸階級」（OBC）を指す後進階層（Pichhada）、指定カースト（SC）にあたるダリト（Dalit）、イスラーム教徒（ムスリム）を意味する少数派（Alpsankhyak）の頭文字をとったものである。OBC のなかのヤ

ーダヴ・カーストとムスリムを支持基盤とする政党であるにもかかわらず、今回 SP はヤーダヴ出身者を 5 名、ムスリムは 4 名しか擁立しなかった。他方、ヤーダヴ以外の OBC から 27 名、ダリトは 16 名、上位カーストからは 10 名が出馬した。こうした候補者選定戦略の結果、SP は支持の拡大に成功したのである。

第 2 に、地元選挙区での活動を怠ってきた多くの現職議員を BJP は再び公認した。その結果、同党の現職議員からは 26 名もの落選者が出ることになった。第 3 に、BJP が憲法を改正して自分たちへの留保制度を廃止するのではないかと OBC とダリトが危惧した。第 4 に、BJP はモディ政権による福祉政策の成果を訴えたが、高い失業率に強い不満を抱いている有権者、とりわけ若年層の支持が離れることになった。

最後にして最大の要因は、モディ人気の低下である。総選挙後に首相になって欲しい人物として、INC のラーフル・ガンディーと回答したのが 36%を占めたのに対して、モディと回答したのはわずか 32%にとどまった。この調査結果から判断すると、少なくともウッタル・プラデーシュ州においてはモディ首相個人の人気に翳りが出てきており、それに依存した選挙戦略をとった BJP は世論を読み間違えていたと考えられる。

おわりに

今回の総選挙で BJP が単独過半数を失った直接的な原因は、ウッタル・プラデーシュ州とマハーラーシュトラ州での大敗にある。これら 2 州を含む主要州での BJP の主な敗因は、農村部の貧困層および社会的下層の支持が離れたことと、モディ首相個人の人气が低下したことに求められる。

ヒンドゥー教の聖地アヨーディヤーを擁し、ヒンドゥー・ナショナリズムの「本拠地」であるウッタル・プラデーシュ州と、インドの経済的首都であるムンバイを州都とするマハーラーシュトラ州で惨敗したことが BJP 指導層に与えた衝撃は計り知れないものであると推測できる。前回を上回る歴史的な大勝を実現できると選挙前に確信し自信過剰に陥っていた BJP 執行部は、単独過半数割れという想定外の事態に直面して、今後の選挙戦略や連立政権の運営方針、政策決定について練り直しを迫られている。3 期目のモディ政権は、ヒンドゥー教徒を優遇しムスリムを排斥するヒンドゥー・ナショナリズム的政策を志向していた 2 期目とは異なり、相当に穏健化することを余儀なくされるであろう。経済政策に関しても、富裕層や大企業に有利な施策よりも、貧困層や中小零細企業の保護を優先せざるを得なくなると考えられる。

-
- ¹ Gyanaranjan Swain, “Decoding the BJP’s Sweep in Odisha”, *The Hindu*, 08 June 2024.
- ² Yatindra Singh Sisodia, “Extraordinary Ascendance of BJP in Madhya Pradesh”, *The Hindu*, 08 June 2024
- ³ Akash Tawar, “In Chhattisgarh, Women Voters Give a Push to BJP”, *The Hindu*, 09 June 2024
- ⁴ Biswajit Mohanty and Ramzan Shaikh, “Delhi Voters were Satisfied with Performance of Central Govt.”, *The Hindu*, 09 June 2024.
- ⁵ Bhanu Kumar Parmar and Shivani Choudhary, “BJP Retains Power, Faces Minor Challenges in Gujarat”, *The Hindu*, 09 June 2024.
- ⁶ Ashutosh Kumar, Nirmal Singh, and Subir Singh Jamwal, “Modi as PM Pitch Did Not Cut Much Ice in Punjab”, *The Hindu*, 09 June 2024.
- ⁷ Sanjeer Alam and Rakesh Ranjan, “NDA Holds Ground in Bihar But Vote Share Dips”, *The Hindu*, 08 June 2024.
- ⁸ Harish Kumar and Devesh .Kumar, “Strategic Manoeuvres Helped Congress Put Up Good Show in Haryana”, *The Hindu*, 09 June 2024
- ⁹ Jyotiprasad Chatterjee and Suprio Basu, “The Smart Politics of the Trinamool”, *The Hindu*, 08 June 2024.
- ¹⁰ Sanjay Lodha, “In Rajasthan, Congress Had a Strategic Approach While BJP Was Complacent”, *The Hindu*, 09 June 2024.
- ¹¹ Rajeshwari Deshpande and Nitin Birmal, “A Reality Check in Maharashtra”, *The Hindu*, 08 June 2024
- ¹² Mirza Asmer Beg, Shashi Kant Pandey, and Akhilesh Pal, “Why the BJP Underperformed in U.P.”, *The Hindu*, 08 June 2024.

執筆者紹介 上田知亮（うえだ・ともあき）

東洋大学法学部准教授

博士（法学）（京都大学）

専門：近現代インド政治

主著：『植民地インドのナショナリズムとイギリス帝国観：

ガンディー以前の自治構想』（ミネルヴァ書房、2014年）（単著）

Law and Democracy in Contemporary India: Constitution, Contact Zone, and Performing Rights (Palgrave Macmillan, 2019)
(co-editor with Tatsuya YAMAMOTO)



**インド人民党の南インド進出と存在感を強めた地域政党
BJP's expansion to South India and regional parties
that have strengthened their presence**

岐阜女子大学特別客員教授
Visiting Professor, Gifu Women's University
茅賀 政幸
Masayuki TAGA

***Abstract:** Though the BJP led by PM Modi fell short of a majority with 240 seats in the 18th Lok Sabha election, the BJP's share of the vote was down less than one percentage point from the previous election and up more than five percentage points from the 2014 election, when the party won 282 seats, and the increase or decrease of seats won is not a uniform trend across the country but varies significantly from state to state.*

In this article, focusing on the election results mainly in the states of South India, I will decipher how the growing presence of regional parties has affected the power relations between the BJP and the Congress, and look at why and how the PM Modi's third NDA government will have to place more emphasis on regional parties and state governments.

はじめに

第18回インド下院総選挙前にはほとんどの世論調査がインド人民党（以下 BJP）の議席拡大を予想し、モディ首相はじめ BJP 幹部も極めて高い議席獲得目標を喧伝していたが、選挙結果は BJP が前回選挙より 63 議席減、単独過半数に 32 議席足りない 240 議席の獲得するにとどまった。

このため、インド内外のメディアの多くは、選挙結果について、ヒンドゥー至上主義を強めたモディ首相の権威主義的な方向への反対、雇用・失業問題への不満といった面が表れたものとして BJP の後退を強調した。しかし、BJP の得票率は、前回選挙より 1 ポイント以下の減少、282 議席を獲得した 2014 年選挙より 5 ポイント以上の増加となっており、獲得議席数の増減は全国一律の趨勢ではなく州毎に大きく異なっている。

本稿では、南インド各州での選挙結果を中心に、存在感を強めた地域政党が全国政党である BJP とインド国民会議派（以下、会議派）の力関係を如何に左右したかを読

み解き、第3期モディ政権が地域政党、各州政府への対応と配慮により重きを置かざるを得ない状況を展望したい。

I. 選挙結果が示した BJP 一党優位の全般的な趨勢と地域的、州別の特徴

1. 全体的状況

選挙結果を獲得議席数が大きな政党順で示したものが<表1>である。

<表1> インド連邦下院選挙結果 :

第18次選挙獲得議席数上位11政党の獲得議席数と得票率(カッコ内)

	2024年(第18次)	2019年(第17次)	2014年(第16次)
インド人民党 (BJP)	240 (36.56)	303 (37.36)	282 (31.0)
インド国民会議派(INC)	99 (21.19)	52 (19.49)	44 (19.31)
社会主義党 (SP)	37 (4.58)	5 (2.53)	5 (3.37)
全インド草の根会議派 (AITC)	29 (4.37)	22 (4.07)	34 (3.84)
ドラヴィダ進歩連盟(DMK)	22 (1.82)	23 (2.26)	0 (1.7)
テルグ・デサム (TDP) *	16 (1.98)	3 (1.39)	16 (2.55)
ジャナタ・ダル(統一派) (JD(U)) *	12 (1.25)	16 (1.45)	2 (1.0)
シブ・セナ(タッカー派) (SHSUBT)	9 (1.48)	--- **	--- **
ナショナル会議派党(ハワル派) (NCPSP)	8 (0.92)	5 (1.4)	6 (1.6)
シブ・セナ (SHS) *	7 (1.15)	18 (2.05)**	18 (1.81)**
人民の力党(ラム・ガイラス派) (LJPRV)*	5 (0.44)	6 (0.52)	6 (0.41)

(注) * NDA 所属政党。 * SHS は、2019年11月にNDAを離脱、2022年6月にウダヴ・タッカー派とエクナート・シンデ派に分裂、シンデはBJPの協力を得てマハラシュトラ州首相となった。

(出所) 2024年結果はインド選挙管理委員会データ (<http://election24.eci.gov.in>) より、2019年、2014年結果はロークニーティ資料 (<http://lokniti.org/lok-sabha-election>) より(但しJD(U)及びNCPSPのみインディア・ボーツ資料 (<http://indiavotes.com>) より作成。

また、便宜的にインドをジャンム・カシミール以外の連邦直轄地(7直轄地7議席)とアッサム州以外の北東部諸州(7州11議席)を除き、北・中部、東部、西部、南部の4地域に分けて、BJPの地域、州別の獲得議席数、得票率を示したものが<表2>である。<表1>からは、BJPは過半数以下に議席を減じたものの他党を凌駕する一党優位にあること、社会主義党(SP)、全インド草の根会議派(AITC)、ドラヴィダ進歩連盟(以下DMK)、テルグ・デサム党(以下TDP)、ジャナタ・ダル(統一派)(以下JD(U))といった地域政党の健闘が目立つこと、また、<表2>からは、BJPの獲得議席の増減

は全国一律ではなく、地域ごとに、地域内でも州毎にかなり異なった結果となっていることが解る。(注1)

〈表2-1〉 インド人民党の州別、地域別獲得議席数と得票率（北・中央部）

〈連邦直轄地ラダックを除く〉〈ジャム・カシミール及びパンジャブ以外はヒンディー語州〉

	総議席	2024年議席（得票率）		2019年		2014年	
全国	543	240	(36.56)	303	(37.36)	282	(31.0)
<北・中央部>	<253>	<129>		<182>		<195>	
×ジャム・カシミール*	5	2	(24.36)	3	(46.39)	3	(32.36)
パ ン ジ ャ ブ	13	0	(18.56)	2	(9.63)	2	(8.74)
◎ヒマチャル・プラデーシュ	4	4	(56.44)	4	(69.11)	4	(53.35)
◎ウッタラカント	5	5	(56.81)	5	(61.01)	5	(55.32)
×ウッタール・プラデーシュ	80	33	(41.37)	62	(49.56)	71	(42.32)
◎デリー	7	7	(54.35)	7	(56.56)	7	(46.41)
ハリヤナ	10	5	(46.11)	10	(58.02)	7	(34.74)
×ラージャスタン	25	14	(49.24)	24	(58.47)	25	(54.94)
◎マディヤ・プラデーシュ	29	29	(59.27)	28	(58.0)	27	(54.03)
◎チャッテスガル	11	10	(52.65)	9	(50.7)	10	(48.74)
×ヒール	40	12	(20.52)	17	(23.58)	22	(29.38)
ジャルカント	14	8	(44.60)	11	(50.96)	12	(40.11)

〈表2-2〉 インド人民党の州別、地域別獲得議席数と得票率（西部、東部、南部）

〈議席割り当て2議席以下の北北東部諸州、プドゥチェリー準州及び連邦直轄地を除く〉

	総議席	2024年議席（得票率）		2019年		2014年	
<西部>	<76>	<34>		<50>		<51>	
◎グジャラート	26	25	(61.86)	26	(62.21)	26	(59.05)
×マハラシュトラ	48	8	(26.18)	23	(27.59)	23	(27.32)
×ゴア	2	1	(50.79)	1	(51.18)	2	(53.45)
<東部>	<77>	<41>		<35>		<10>	
西ベンガル	42	12	(38.73)	18	(40.25)	2	(16.84)
○オディシャ	21	20	(45.34)	8	(38.37)	1	(21.54)
アッサム	14	9	(37.43)	9	(36.05)	7	(36.51)
<南部>	<129>	<29>		<29>		<21>	
*タミル・ナド	39	0	(11.24)	0	(3.66)	1	(5.47)
*アンドラ・プラデーシュ	25	3	(11.28)	0	(1.0)	** 3	(8.5)
*テランガナ	17	8	(35.08)	4	(19.5)	**---	
カルナータカ	28	17	(46.06)	25	(51.38)	17	(43.01)
*ケララ	20	1	(16.68)	0	(12.93)	0	(10.33)

(注) 州名の頭の◎は BJP が得票率 50%以上で議席をほぼ獲得している盤石の州、○は今次選挙で議席数・得票率を大きく伸ばした州、*は議席数の多少に係わらず得票率を大きく伸ばした州×は 2014 年より得票率が低い州。

(出所) 2024 年結果はインド選挙管理委員会データ (<http://election24.eci.gov.in>) より、2019 年、2014 年結果はロークニティ資料 (<http://lokmiti.org/lok-sabha-election>) より(但し、JD (U)及び NCPSP のみインディア・ボーツ資料 (<http://indiavotes.com>))より作成。

2. 南インド各州の結果とその特徴

次に、南インドのアンドラ・プラデシュ（以下 AP）州、テランガナ州、カルナータカ州、ケララ州、タミル・ナド州の 5 州及びプドゥチェリー準州の結果を〈表 3〉に示す。

〈表 3〉 南インド各州における各党獲得議席数と得票率(カッコ内)

	BJP	INC	地域政党				その他		
タミル・ナド州			DMK	ADMK	VCK	MDMK	CPI (M)	CPI	IUML
39 議席	0 (11.24)	9 (10.67)	22(26.93)	0(20.46)	2	1	2(2.53)	2(2.15)	1
アンドラ・プラデシュ州			TDP	YSRCP	JnP				
25 議席	3 (11.28)	0 (2.66)	16(37.79)	4(39.61)	2				
テランガナ州			BHRS				AIMIM		
17 議席	8 (35.08)	8 (40.01)	0(16.68)				1 (3.02)		
カルナータカ州							JD(S)		
28 議席	17 (46.06)	9 (45.43)					2 (5.6)		
ケララ州			KEC	RPS		IUML CPI (M)			
20 議席	1 (16.68)	14 (35.06)	1	1		2 (6.07) 1 (25.82)			
プドゥチェリー準州			ADMK						
1 議席	0 (35.81)	1 (52.74)	0 (3.11)						

(出所) インド選挙管理委員会データ (<http://election24.eci.gov.in>) を元に作成。政党名略称はインド選挙管理委員会に基づく。

南インドの議席数合計は全国議席数の約 4 分 1 を占める 130 議席であるが、BJP はこのうち 29 議席の獲得にとどまっており、北・中央部や東部での獲得議席数が過半数を超えていることに鑑みると、これまで同様、BJP の勢力が比較的弱いことを示している。しかし、BJP は前回大躍進したカルナータカ州を除いた 4 州で得票率を大きく伸ばしており、南部での各党獲得議席数及び得票率は州毎にかなり異なっている。

(1) カルナータカ州での会議派の善戦と BJP の苦戦

カルナータカ州では、BJP が 25 議席を獲得した前回選挙より得票率を 5 ポイント下げ、8 議席減の 17 議席となり、会議派が前回より得票率を 12 ポイント伸ばし、5 議席増の 9 議席を獲得し、同州における BJP の後退と会議派の回復を示すものとなった。

カルナータカ州には強い地域政党がないため、インド南部では、BJP と会議派が互いに凌ぎをけずっていた唯一の州である。2023 年 5 月の州議会選挙では、政権党であった BJP が 2019 年下院選挙時より得票率を 15 ポイント減じ、11 ポイント増加した会議

派が 135 議席を獲得してシッダラマイヤ会議派政権が樹立された。その時の会議派、BJP の得票率がそれぞれ 43.2%、36.3%であったのに対し、今次選挙ではそれぞれ 45.43%、46.06%となった。BJP が今次選挙で州議会選挙時より 10 ポイント得票率を伸ばしたことを踏まえると、BJP と会議派との勢力バランスの変化を議席数の増減のみからは結論づけられない。

(2) AP 州での TDP・BJP 連合の勝利

AP 州では、州政権を担っていた YSR 会議派党（以下 YSRCP）が 16 議席を獲得した前回選挙より 12 議席減、約 10 ポイントの得票率減となり、同時に行われた州議会選挙でも大敗した。TDP が連邦下院 16 議席、州議会で 135 議席を獲得する大勝となり、TDP と選挙協力を行った BJP も下院で 3 議席、州議会で 8 議席を獲得した。

この結果は、ジャガン・モーハン・レディ YSRCP 州政権への不満、現職批判が極めて強く、その影響が州議会選挙ばかりでなく連邦下院選挙にも表れたものと言える。また、YSRCP、TDP、BJP の得票率がそれぞれ 39.61%、37.79%、11.28%であったことから、YSRCP と TDP という 2 つの強い地域政党の対抗軸の中で、TDP と BJP が選挙協力を行ったことが両党の勝利と躍進に大きく影響したとも言えよう。

(3) テランガナ州でのインド民族会議（以下 BHRS）の敗退

テランガナ州では、地域政党の BHRS と全国政党の BJP と INC とが三つ巴の戦いとなり、前回選挙で 9 議席を獲得し、2023 年 12 月まで州政権与党であった BHRS が 1 議席も獲得できない大後退となり、BJP と会議派が 8 議席ずつ獲得した。

2023 年 12 月の州議会選挙では、チャンドラ・シェーカル・ラオ州首相率いる BHRS 政権への不満、現職批判感情が強く表れ、BHRS の大敗となり、勝利した会議派のレヴァント・レディを州首相とする政権が樹立されたところであった。下院選挙結果は、現職批判の影響が成立して間もない会議派政権に対するよりも昨年末まで過去 5 年政権の座にあった BHRS 政権に対するマイナスに大きく働き、BHRS から会議派と BJP の双方に大きく票が流れたものと見られ、両党が半々に議席を分け合うものとなった。

(4) ケララ州での統一民主戦線（以下 UDF）の勝利と BJP の浸透

ケララ州では、州政権を担っているインド共産党（マルクス派）（CPI（M））を中心とする左翼民主戦線（LDF）と会議派を中心とする統一民主戦線 UDF がほぼ拮抗する勢力となっているが、会議派が 14 議席、UDF として 18 議席を獲得し、LDF は CPI（M）の 1 議席しか獲得できなかった。これも、現職批判、州政権に対する不満の表れが影

響したものと言える。他方、BJP の得票率が 16.68%となり同州で初めて議席を獲得したことは、後述の通り、BJP の支持母体である民族奉仕団（以下 RSS）の浸透拡大の影響が表れたものと言えよう。

（5）タミル・ナド州での DMK 連合の勝利

タミル・ナド州では、州政権与党であるドラヴィダ進歩連盟（以下 DMK）及びその協力政党が 39 全議席を獲得、全インド・アンナ・ドラヴィダ進歩連盟（ADMK）及び BJP は議席を獲得できなかった。州議会野党第 1 党の ADMK は DMK より 6.5 ポイント少ない 20.46% の得票率にとどまり、衰退傾向からの回復が見られなかった一方、州議会に 4 議席を有するにとどまる BJP は前回の 3 倍以上となる 11.24% の得票率をあげ、RSS の浸透が同州でも進み、それが影響したことを示唆する。会議派は BJP より少ない 10.67% の得票率で前回と同じ 9 議席を獲得し、DMK との選挙協力が極めて有効であったことが示された。

タミル・ナド州の有権者のほとんどはタミル語話者であり、タミル民族、タミル文化に対する誇りが強く、DMK は、BJP が北インドのヒンディー語とラーマ神を全国、タミル・ナド州に普及させようとしているとし、それに対抗して「ドラヴィダ・モデル」による開発を進めるとして、タミル人感情に訴える選挙キャンペーンを行った。DMK が前回より 6 ポイント得票率を減らしたのは現職批判、州政権に対する不満の表れと言えるが、それにもかかわらず、DMK とその協力政党が全議席を獲得したのは、BJP に不信を抱くタミル人の感情が DMK を下支えした面があるとも見られる。（注 2）

II. 選挙結果の要因

それでは、なぜ、このように各州で異なる結果がでたのか、そもそも BJP の勢力が比較的弱かった南インド各州の間でも違いが顕著に現れたのはなぜだろうか。

1. モディ人気に頼った BJP の勢力拡大の限界

BJP は、選挙綱領でも過去 10 年間のモディ政権の成果を強調し、モディ首相自らが各州を勢力的に演説して回り、BJP 支持を訴えた。インド社会開発研究所（CSDS）が選挙前に行ったロークニーティ世論調査では、首相となるにふさわしい人物として、モディ首相支持が 47.3%と、2019 年選挙前の調査結果と比べて 2 ポイント強、2014 年選挙前より 13 ポイントの増加となり、2014 年にモディを支持する者が BJP を支持する者より 2 ポイント強多かったものが、今次選挙前にはそれが 8 ポイントに拡大した。

また、投票する政党として BJP が 39.7%、INC が 20.8%と、双方とも 2019 年選挙前より 3 ポイントずつ高い調査結果がでていた。(注 3)

しかし、選挙結果は、前回選挙結果と比べると、BJP は全国では 0.8 ポイントの得票減、北東部諸州を除くと、議席を総取りしたヒマーチャル・プラデシュ州、ウッタラカンド州、デリー準州を含めた 13 州・デリー準州で得票率を減らした。これは、前回選挙で功を奏したモディ人気に頼った BJP 支持の拡大は、それだけでは限界があることを示したものと言えよう。

2. BJP 一党優位を支える民族奉仕団(RSS)の拡大

他方、BJP は、基盤が強かった中部のマディヤ・プラデシュ州、チャッテスガル州のみならず基盤の弱かった南部各州で得票率を伸ばした。この背景には BJP の支持母体である RSS を中心とするサング・パリワールの全国での、とりわけこれら各州での活動の拡大が指摘できよう。(注 4)

RSS の末端レベルの集合体はシャーカールと呼ばれるが、RSS の 2019 年版年報によれば全国に 84,877 のシャーカール(その内、毎日行われているものが 59,226、週毎に行われているものが 17,229)があるとされ、メンバー数は公表されていないが、2016 年に約 600 百万人だったものが 2023 年には 800 百万人を超えているとの推定がある。また、シャーカールは BJP の基盤が弱い南インドでも、タミル・ナド州では 5 年前より約 700 増の約 2,000、ケララ州では約 5,000 のシャーカールがあると見られる。これが BJP のタミル・ナド州やケララ州での得票率増加となって現れていることは疑いない。

3. 対外脅威、イスラム教徒の差別化とヒンドゥー至上主義

BJP は、かねてよりラーマ生誕寺建立を選挙公約にしていたが、本年 1 月にモディ首相隣席の下、ラーマ生誕寺院落成法要が大々的に行われた。第 2 期政権、モディ首相の成果として大々的にアピールし、ヒンドゥー教徒の票固め、得票拡大を狙ったことは明らかである。しかし、選挙結果は、BJP がラーマ生誕寺のあるファイザーバード選挙区を含めウッタラ・プラデシュ(以下 UP)州で 33 議席を減らし、この目論見が大きく狂うものとなった。

2019 年選挙前の 2 月にはジャンム・カシミール州でパキスタンに根拠を持つテロ組織ジェイシュ・モハマドによるとされる自爆テロが発生し、これに対してインド空軍がパキスタンへの越境空爆を行った。これが強いインドの実現を掲げるモディ首相率いる BJP の大勝に大きく働いたと見られている。しかし、今次選挙前のラーマ生誕寺建立の成果アピールにも関わらず BJP が議席数も得票率も減じたことは、越境テロと

いう対外脅威には大きく反応した有権者もヒンドゥー至上主義の強化、国内的なヒンドゥー教徒とイスラム教徒の差別化による支持拡大という流れには乗らなかったものとも言えよう。(注5)

特に、タミル・ナド州では、タミル語、タミル文化への強い愛着と誇りから、BJPによる同州へのヒンディー語導入の動きへの反発があることに加え、反バラモン、反カースト差別、反アーリア人といった性格を持ったドラヴィダ運動の歴史があること、また、シヴァ神やビシュヌ神に加え地場の諸神を祀り祈るヒンドゥー教徒は「BJPが北インドの神であるラーマ神信仰をタミル・ナドに広げようとしている」との認識があるため、BJPの「ヒンドゥットワ」(ヒンドゥー至上主義)による支持拡大には否定的なのである。

4. 経済政策、特に雇用・失業問題、農村対策への不満

ロークニーティ選挙前世論調査では、最重要問題として雇用・失業に27%、物価に23%、開発に13.3%が投じられた。2019年選挙前世論調査では、それぞれ19.2%、6.5%、14.9%であったことから、今回は確かに雇用・失業と物価が前回以上に大きな要因となっていたと言える。(注6)他方、雇用・失業や物価の問題はインド全国に共通するものであり、各州で若干の違いはあったとしても、特段の大きな違いがあるとは見られないことから、BJPの各州での得票率、獲得議席数の増減の違いをモディ連邦政府の雇用・失業問題対策、物価対策への不満の表れのみから説明することは難しい。

しかし、この不満の表れを現職批判感情、州政権に対する不満の顕現という観点と併せて考えると説明がつく。例えば、UP州やラージャスタン州はBJPが州政府与党であることから、不満が連邦政府、州政府双方の政権党であるBJPに不利に大きく働いた。また、州議会選挙が同時に行われたAP州では州政府与党YSRCPが大敗し、対抗地域政党のTDPが躍進、勝利した。オディシヤ州では州政府与党ビジュ・ジャナタ・ダル(BJD)が大敗し、野党第1党であったBJPが躍進、勝利したが、これは現職批判、雇用・失業問題や物価対策への不満が連邦政府与党より州政府与党に対してより強く表れたものとも見られよう。

ロークニーティ選挙後世論調査で、「中央政府の過去5年実績で最も好ましくなかったことは」との質問に、失業率の増加、物価上昇・インフレを選んだ者がそれぞれ23.1%、23.8%と他項目に抜きんじて多かった一方、「投票する政党を決めるにあたり中央政府の実績と州政府の実績とどちらをより考慮するか」との質問に中央政府、州

政府、その双方を選んだ者がそれぞれ 22%、22.2%、40.1%となったことは、これを裏付けている。(注7)

5. 地域政党との選挙協力

BJP は今次選挙においては 12 州で地域政党との選挙協力を行ったが、特に、AP 州での TDP との協力、アッサム州での統一人民党(リベラル派) (UPPL) 及びアッサム人民評議会 (AGP) との協力、ビハール州での JD (U) 及び LJPVR との協力、等が NDA、BJP に大きく有利に働く結果となったことを示している。

AP 州では、TDP と協力した BJP は 11.25% の得票率で 3 議席を獲得しており、タミル・ナド州において前回協力した ADMK との協力なしに単独で戦い、会議派より多い 11.24% の得票率をあげながらも議席を獲得できなかったことと対照的である。他方、会議派がタミル・ナド州で 10.67% の得票率で前回と同じ 9 議席を獲得できたのは、DMK との協力に大きく依るものである。

また、テランガナ州では地域政党の BHRS が大きく衰退し、カルナータカ州には強い地域政党がないことから、BJP と会議派との直接的な戦いとなり、双方とも地域政党との協力による影響が少なく、BJP と会議派が拮抗する結果をもたらしたと言えよう。

Ⅲ. 第 3 期モディ連立政権の課題と展望

このような選挙結果とその要因から第 3 期モディ政権の次のような課題が浮かび上がる。

1. 連立協力政党への配慮による BJP 独自政策の抑制

NDA 連立政権は第 3 期目に入るが、第 1 期、第 2 期と大きく違う点は、BJP 単独では下院議席の過半数を有していないことである。

第 1 期、第 2 期では BJP が他の連立協力政党の意向を気にせずに BJP 独自の政策を押し進めても、政権運営が難しくなることはなかった。このため、圧倒的多数の 303 議席を獲得した第 2 期には、ジャンム・カシミール州の特別な地位を定めた憲法第 370 条の廃止と同州の連邦直轄地化とラダック地方の分離、市民権法の改正、ラーマ生誕寺院建設等が実施された。しかし、第 3 期では、連立協力政党の支持なしに政権の維持、運営は難しいことから、BJP 独自の選挙公約、RSS の意向に沿ったヒन्दゥー至上主義を強める政策を進めることは難しい。BJP は、立法化された市民法改正の実施や統一民法典の導入を選挙公約にしているが、JD (U) はじめ NDA 連立協力政党のほとんど

はこれらに反対もしくは慎重な姿勢であり、これらを推し進めることにはブレーキがかかろう。

2. 各州の地方経済開発、雇用・失業対策に集中した取り組み

今次選挙においても有権者の生活に直結した経済問題、特に、経済成長、インフラストラクチャー整備等によるプラスの面よりも雇用・失業や物価上昇といったマイナスの面が選挙結果を左右するより大きな要因となったが、それは連邦政府与党 BJP、モディ政権に対するばかりでなく、各州の政権与党に対して大きなマイナスの影響を及ぼした。

このことから、第3期モディ政権は、全国一律ではなく各州の事情に応じた経済開発、雇用・失業対策、農村対策等への配慮をこれまで以上に払わなければならないであろう。また、NDA が政権を担う州、政権奪取の可能性が高い州の開発への資源投入拡大といったことも検討されよう。特に、連邦下院で16議席を獲得したTDPのチャンドラバブ・ナイドゥ AP州首相の支持、協力如何は政権の存続如何にも大きく影響することから、AP州への連邦政府からの資源投入等には特別の配慮がなされよう。

3. 強いインドを目指すモディ政治の展望

世論調査と選挙結果からは、以上に加え、対外的に強いインド、それを実現しようとする強い首相、連邦政府は望むものの、各州事情を組まずに一律の方向で政策決定を行う強い中央集権化は望まない、という有権者の意向が読み取れるのではないだろうか。それは、また、民主主義、連邦制、世俗主義を国是とするインドにおける全国政党の責任が問われるものとして、BJPへの支持は2019年選挙で示唆されたヒンドゥー至上主義、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒との分断化といった方向によるBJPの盤石化ではなく、2014年選挙で期待された「グジャラート州を経済発展させたモディ首相によるインドの経済発展への支持」を選考したものとも捉えられないであろうか。即ち、有権者の多くが欲する強いインドは、国民の一部の少数派コミュニティーを犠牲にしてのヒンドゥー主義の強化ではなく、国民全てが幅広く裨益する経済発展によってであると。

そして、南インド、とりわけタミル・ナド州やAP州の有権者は地域政党であるDMKやTDPへの強い支持を通じ、全国政党であるBJP及び会議派に対し、また、NDA連邦政権に対し、南インド各州に対する考慮と配慮を強く求めたのではないか。第3期モディ政権が、またBJP及び会議派がこれらにどう応えていくのか、そして、それがBJP

一党優位の政治、BJP、会議派、地域政党の合従連衡の動きにどのように影響するのか、今後の動向を占う鍵として注目される。

(1) 本稿での使った選挙結果（議席数、得票率）は、2024年についてはインド選管理委員会データ (<https://results.eci.gov.in/>) より、2019年及び2014年については、インド社会開発研究所（CSDS）ロークニーティ資料データ (<https://www.lokniti.org/lok-sabha-election>) に基づく。

(2) 「ドラヴィダ・モデル」については、*Kalaiyaran A., Vijayabaskar M. "The Dravidian Model- Interpreting the Political Economy of Tamil Nadu" 2021, Cambridge university Press*に詳しい。

(3) インド社会開発研究所（CSDS）によるロークニーティ世論調査については、<https://www.lokniti.org/national-election-studies>

(4) サング・パリワールは、RSSを中心に政治部門のBJPの他、世界ヒन्दゥー会議（VHP）、全インド学生評議会（ABVP）、インド農民組合（BKS）、インド労働組合（BMS）、インド開発評議会（BVP）、全インド教育連盟（VBABSS）、部族民福祉アシュラム（VKA）、世界報道センター（VSK）等幅広い分野に及ぶ組織を総称した呼び名。RSSの活動の拡大、浸透についての最近の動向として、RSSの機関紙であるオーガナイザー掲載記事 “*Akhil Bharatiya Pratinidhi Sabha: RSS expands reach with over 73,000 daily shakhas across 922 districts across Bharat*” 2024年3月15日、Yudhajit Shankar Das “*RSS has climbed the Kerala mountain, but where's the BJP?*”, *India Today*, April 1, 2024 参照。

(5) インド軍によるパキスタン空爆については、栗田真広「インドの対パキスタン空爆—その背景とインプリケーション」NIDSコメンタリー第92号、2019年3月、防衛研究所、ラーマ神生誕寺建立については、*Geeta Pandey and Yogita Limaye "Ayodhya Ram Mandir: India PM Modi inaugurates Hindu temple on razed Babri mosque site"* 2024年1月23日、BBC等参照

(6) https://www.lokniti.org/media/PDF-upload/1718270418_74355000_download_report.pdf

及び https://www.lokniti.org/media/PDF-upload/1570173782_98991600_download_report.pdf より

(7) https://www.lokniti.org/media/PDF-upload/1718435207_67606300_download_report.pdf より

執筆紹介 笄賀 政幸（たが まさゆき）

岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授。
1983年に横浜市立大学卒業後外務省入省。
南アジア各国の日本国大使館等に勤務した後、
2016年より在コルカタ日本国総領事館、
2020年より2024年3月まで在チェンナイ
日本国総領事館総領事。2024年5月より現職。
専門はインド政治、南アジア事情。

